

大崎下島御手洗の生活世界：ある船大工からの聞き書き

TSUCHIYA, Hisashi / 土屋, 久

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

12

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

108

(発行年 / Year)

2012-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008252>

大崎下島御手洗の生活世界

—ある船大工からの聞き書き—

土屋 久

はじめに

本稿は、大崎下島御手洗地区（現、広島県呉市）の船大工からの聞き書きである。

本稿で話を聞いた船大工を仮にMさんとする。Mさんは、昭和5年（1930）生の男性。平成23年4月現在、80歳の方である。今日まで、人生の大半を船大工として大崎下島御手洗で過ごし、昭和33年に赤線が廃止される前の花街としての御手洗の栄華を体験してきた方である。船造りでは、オチョロ船という娼妓を乗せる船や農船、漁船の製造に関わってこられた。また、木造船からFRP素材の船への劇的な変化ⁱをも体験されている。

Nさんは、現在船の製作には関わっていないが、前記した船の模型作りをおこないながら、御手洗を訪れる観光客にかつての町の姿を説明されている。

このNさんという一職人のまなざしを通してみた花街の姿を、彼の生業である船造りに関わる伝承とともに、聞き書きという方法で記録に残そうとしたものが本稿ということになる。

尚、本稿の聞き書きについて一言しておく、基本的にテープに録音したNさんの話を起し、その語りに忠実であるよう配慮したが、その際明らかな重複部分を省き、主語や目的語を補うなどの編集を適宜おこなった。また、テープに記録されていないが、筆者がノートに記した内容を、必要と思われる箇所には補った。

1 大崎下島と御手洗

大崎下島は、瀬戸内海のほぼ中央に位置する島である。面積17.82km²。行政的には、平成17年3月の合併により広島県呉市に編入され、現在、呉市豊町（大長、久比、沖友、御手洗地区）と呉市豊浜町の一部（大浜地区）からなる。中世までは伊予国の一部であり、そのため四国側との繋がりがりも深い。島の中心的な港である大長港は、瀬戸内海航路の結節点として、近年まで、三原、竹原、仁方、呉、広島、今治、松山など、四方に航路が開けていた。愛媛県の今治へは高速船で30分、フェリーで1時間ほどであり、呉や広島に渡るより時間的に近かったこともあり、買い物や通院では、本土側に行かず、四国側に行く人たちが多かったという。しかし、平成20年11月、上蒲刈島 - 豊島間が架橋され、本土と繋がったことにより、現在ではバスや車を利用して、呉・広島方面へ行く人が増えているとのことである。また、船に関しては、人口減のために採算がとれず、架橋を待たずに廃止となった航路もあり、現在（平成23年9月）竹原行きの旅客船と大崎上島行きのフェリーのみが通っている。しかし、これも存続が危ぶまれている状態で、フェリーを利用して大崎上島へみかんの出作（渡り作）にしている農家にとって、航路が廃止になったら生計を絶たれる可能性も危惧されている。

大崎下島は、御手洗を除いて、その多くが農業を主な生業としている。明治末頃より、桃から柑橘類への転換が図られ、現在農家のほとんどが柑橘栽培をおこなっている。中でも大長は最大の集落で、人口も過半数を占めている。島の平均斜度は三〇度、その狭い谷間から海岸部にかけて裾拡がりに、民家が寄り集まるように集落が形成されており、山の斜面にはびっしりみかん畑が作られている。すくない島内の土地を耕し尽くしてしまうと、耕地を求めて近隣の島や本土にまで行く出作がおこなわれた。そのため、大長を中心に、みかん栽培やみかんの運搬に用いられる農船をはじめとした木造船づくりが栄えた。

御手洗は大長と隣接しながらも、こうした大崎下島一般の歴史とは異なり、17世紀半ばに風待・潮待ちの港町として成立・発展した。その原点は、御手洗の岬に帆を休める本綿船に大長の住民たちが酒食をサービスするために設けた仮小屋にあり、それらの家屋が定住するようになり、御手洗の町並みができるようになったと考えられている〔豊町教育委員会 2000:105〕。この街並みが、

徐々に花街として発展していくわけだが、18世紀中頃には、遊女の数も100人を数え、最も大きな若胡屋という茶屋では、46人を数えたという〔豊町教育委員会2000:413〕。Mさんの語りと直接に関係する御手洗の近代の花街についてみると、旅館・料理屋などに招かれて芸を披露する芸妓はオカゲイシャ（岡芸者）、それ以外の娼妓はオキゲイシャ（沖芸者）、あるいはフナゲイシャ（船芸者）として区別されていたという。オキゲイシャは、オチョロ舟と呼ばれる小舟で停泊船に漕ぎつけ、売春業とともに洗濯や掃除などの船員の身の回りの世話までおこなったということである。また、こうしたオキゲイシャの制度は近世初期から売春防止法が施行された昭和33年（1958）まで持続されていた〔加藤 2009:101 - 102〕。

2 Mさんからの聞き書き

2-1 結婚と駆け落ち

子どもは、四人。男三つに女一つ。

ワシの嫁は、ここの御手洗町の助役の娘やったんよね。ほいで大工風情に嫁にやらんとなった。職は大工やし、酒は飲むし、女遊びはする。みな親が知っとるけんの。姉さんらは、歯医者に嫁にいったりしとる、やらんいうて。困ったもんやなど。ほいて、駆け落ちするかって逃げたんよ。『矢切の渡し』がヒットする前やったんよ。ワシが24歳で、嫁が22歳。ほいで、坂出（現、香川県坂出市）まで逃げて、ほいて、坂出で大工しおったんだけど、坂出におばあさんがおった。そのおばあさんが御手洗に知らせた。そしたら、嫁を連れにきた。ほいで、嫁には「必ず迎えに来るからここで待っとれ」っていって、ワシだけ逃げて、友達が京都におったもんじゃけん、京都に二、三日居候して、大阪の天保山に出て、高松に渡って、高松から坂出にいて、そこで嫁を連れて、今度は北海道に逃げんかって、釧路に行って、釧路に二年半おった。逃げてる間もずっと船大工。北海道は寒くて、もうちいと温い方へ行こうと、東京まで出てきて、川船を造った。川砂を採りに行く船。王子の方で、荒川だな。東京で、子どもが二人になってな、長男と次が長女、二人とも東京で生まれた。二人になったら、これはどうにもならんと、御手洗に帰らんかということになってな、それから帰ってな。帰ってからも、なかなか勘当が解けんかった。長男が六年生になるまで。長男が、健康優良児やらなにやらで、表彰されて、新

聞にでかでかと載ったんよ。それから、(嫁の親の機嫌も)なんばか戻ったんじゃけどもね。

東京でも、随分遊んだがな、みんなベッピンサンと変わらんよ。一度、女房とそっくりなオナゴを見たことがあった。本当によく似ていた。

(女房に)死なれて、一三年が来るんやけど、いいオナゴやった。器量はいいし、頭はええし、近所ともあんまり、いらんことをしゃべらんし。ワシより二つ下。死なれたんが一番辛い。子どもだけは、ええ案配に育ててくれてな。長女の孫が、京大を卒業して、京都に嫁にいて、今度ひい孫ができる。次男坊、三男坊は東京。あっちは、養子みたいなもんじゃ。東京いてな。女の子ばかりの長女と結婚しとるんで。嫁さんの方に引っ張られてしまう。長男と長女がどっちも広島におる。橋が架かったから、すぐに帰って来れるから安心や。

(今は、)毎日ここ(模型を作る作業場)に来よるよ。月曜日と木曜日は、足のリハビリにデイサービスに行きおる。小腸を90センチほど除けたんよ、その後に、足を痛めたんよ。今も酒は飲むよ。若い頃から、「御神酒じゃ」と日本酒を飲み慣れてる。焼酎もダメ、ビールもだめ、日本酒だけは昔から飲み慣れてるからな。

2-2 船大工の仕事

一八の時、最初につくったのはオチョロ船。昭和33年に売春防止法ⁱⁱができて終わりになった。オチョロ船は一番大きなんで、六メートルあるなしやったね。オチョロは、小さいよ、半トン位よ。オチョロ船も、遊郭でおなごを置いておるところの親父がみな一隻ずつ構えておった。チョロっていう名前も、定かでないよ。大きい船の間をちょろちょろしておってチョロになったんか、定かでないよ。誰が、「オ」を付けたんか、わしらは、チョロチョロいいおった。この形は、やっぱり、雨よけ風よけのためよね。

ウチ(の造船所)は、親父とワシと二代。息子は、おるけどやらされん。女房を養えん。オチョロ舟は、始めは、土間に板を並べて、板図っていう図面を書いて、作業をした。一間もんの板よね。図面は、残らないのよ、終わったら剥がしてまた使う。板を残しとく余裕がないのよ。農船も板図。みかん箱が横に六杯、大きい舟は七杯、縦にも七杯、重ねて二段に箱がきちっと納まるように作る。農船はオチョロよりでかい。12メートル位ある。一家に一パイはあった。農船は、昭和30年位で、32万から37、8万円ぐらいかな。その頃は、もう

オチヨロは売春防止法でだめになって、新しいのを造るもんはおらんかったな。(農船はな)始めは、大きい百姓が櫓で漕いでいく舟をもっちゃった。それに便をもらって、便乗して、出作にいきおった。船をもっていない人はな。そのかわり、櫓を漕がねばならんのよね。「便借り」っていいおった。同じ様な場所に畑があるような者が乗って行ったな。そやけど、朝は早う出て待ちよらねばあかんし、帰りも思う時に帰られんし、それで、皆自分のウチに一パイずつ船をもつようになった。そしたら、だんだんエンジンも据えるようになっていった。終戦後、電気着火から始まって、今のディーゼルになっていきおった。そうなると、船の速力の競争が大工の腕になりおった。もう、エンジンメーカーからは、20馬力なら20馬力で、箱で入ってきて、それを船に積み込むわけじゃけん、後は船大工の腕次第になるわけ。ワシの考えでは、潮の抵抗がないように笹の葉を浮かしたようにせんにゃならんのよ。包丁みたいに船の形を鋭くした方が早いように思うんじゃけど、農船は荷物も積むしな、そうはいかん。ただ、この形にするには、板を捻じらにゃいかんけん、手間なのよね。船体の姿もいうよ。格好がいいじゃ悪いじゃいうてね。船の頭の部分のミヨシなんかもね、大きいからいいっていうもんじゃない。子どもが大人の帽子をかぶったようになるからな。iii材木は、日向の弁甲杉がよかった。御手洗に大島材木っていう店があって、弁甲を仕入れてた。ここから、板に引いた弁甲材を島々の造船所に送ってた。日向から杉を積んだ船が来て、それを海に落として筏に引いてもってきて、その上をびよんぴょん飛んでね、それでみて、気に入ったのを買いおったけどね。ワシ等は、ここに入っとる船のものと飲みおったからね、いいのを教えてくれた。あれがいいMさん、これがいいMさんてね。だから、Mはいい材料を使うっていわれたね。そんなとき鰯の塩辛を一升瓶に詰めてきたのを貰ったんじゃが、女房が嫌ってね。

釘は、軋じゃった。そこの明石にも小さい鍛冶屋があって、船釘作ってたんよ。板と板の隙間に詰める巻き肌いうがあるんじゃがね、檣の皮を蒸して叩いて縄にしたもんじゃがね、それはそこの明石が発祥の地じゃけん。わしらが若い頃には、女の子も皆埃で、真黄色になってね。巻き肌舟なんかもあって、(巻き肌を)売りにきおった。巻き肌だけでなしにね、船釘なんかも積んでね。

チヨロ舟なんかは、船底になにも塗らんかった。月に一回位、フナムシを取るために、タデフネ(燥船)っていうて船底を火であぶってたな。ここの神社の沖には、タデバ(燥場)があって、農船や機帆船もそこでやってたな。タデ

ハマ（燥浜）組合っていうのもあって、松葉とか柴とかを隣村のもんやらが、もってきたのを買って、それを倉庫に入れて、タデフネする船に一輪なんぼで売りおった。機帆船でも「あかのみちがつく」っていうて、今の浸水することをね、そうになったらタデハマに入れて、腐っておったらそこを除けて、そこに新しい木を入れた。「潮の間の仕事」っていった。潮の間の仕事は急がしかつたんだよ。時間がないからな。はじめ、検討がつかんのじゃけん。どれくらい腐っとるのか。だいたい五時間位かな。手間賃は、普段の倍だったな。日当ね。

新造船は、一パイ分を見積もって、大工が相場を出しとった。遠くからの注文はおらんかったね、九州もおったけど、東は淡路島。だいたい（大崎）下島が多かったね。淡路島なんかからくるのは、墓石みたいのや事業用の石とか運ぶ石船だった。

機帆船から上がり下りする小さい伝馬船も大分造ったけん。機帆船は、ヒキデンマってあってね、乗り降りするための船を一パイはもっておるの。ヤマデンマは、農船のこと、チャッチャ船。豊島の農船は大長のと形が違う。形が違うのは、乗り降りすることを考えたり、その地域の習慣からそうなるのかね。豊島も裏に行くのに、農船を使いおった。今の、蒲刈から掛かってる橋のたもとに行くのに、一周道路みたいなものがないもんじゃけん、船で行きおった。ほいで、豊島はだいたい、今の家船いうて、漁に行く船ばかりじゃったけんね。それも造ったことがあるが、両端の山崎、内浦というところが、今いう百姓がなんぼかあって、農船を使いおったんよね。

今の、アビ漁いうてね、五木と豊島の間で、櫓を漕いでね、エンジンなしで、その音をさしたりしたら、あびが逃げるといので、夫婦で乗ってやる船を頼まれて造ったこともある。夫婦がね、前と後ろに別れて。もうやる人が、いなくなったね。昔は、アビ漁の季節は、五木と豊島の間は、大きい船は通れなかったんよ。アビがイカナゴを狙ってね集まるんよ。イカナゴは、海の米みたいなもんでね。何の餌にもなるんよ。イカナゴの小さい時に、卵とじしたり、パッと釜揚げにして、酢みそで食べたりして美味しかったよ。大きになったら、「骨がまし」ってあって、頭に砂があるしね、そんなときは、頭落として、焼いて酢醤油を付けて食べたな。ここらもおらんかった。その頃は、砂船が、竹原、三原の沖方から、砂を穫ったんやけど、そのお陰で、砂がなくなって、イカナゴの巢もなくなったんかな。ママカリも採りおったんよ。イカナゴ追っかけて、

鯛もきたしな。

(大島) 下島は、漁師が少なく大長の五区っていうところにちいと漁師集落があるだけでな。機械船でなく、櫓漕ぎでやりおった。大長の人は、新造船を造らずに、中古を買うてきて、いきおったけどね。

蛸壺漁の船なんかも造ったけどね。延縄組合なんていうものが豊島にあったけどね、この頃はようけおらないのよ。豊島にも、一本釣りをやる豊浜漁協と、延縄組合と、別にあった。蛸壺も、延縄組合。豊島の船も、木造からプラスチックになる前に、ライニングいうてガラス繊維を合成樹脂で調合して、貼付けるのをやった。ほいで、船も短いのを継ぎ足してね。「Mさん、そんなことで船が保てるんかや」って漁師はいうんやが、ワシは「大丈夫や」いうてね。ようけやらして貰うた。中には、船の真ん中切れっていうのがおってね、機械場と活場とがあるんね、そこを切って伸ばせいうもんが出てきてね、「ようやらんのか」っていわれて、やったんだけど、豊島の漁師も大王も魂消とったな。木じゃけん、入れ違いにして継がんと保たんのよ。グラスファイバー巻いてね。その次「やれ」っていった人がいたけど、やらなかったね。大変なのよ。金もかかるし。初めから新造つくった方がいいよ。

今は、農船もオチヨロも釣り船も注文はないよ。みんなプラスチックになったけん。竜骨は、後からマツラいうて入れるんよ。昔の和船も所々へ、竜骨みたいなものを入れるんよ。オチヨロでも入っているものがあったよ。寄り当りなんかしたら弱いけん、それ入れるんがマツラっていうてね、松の木の根元の曲がったようなを根板にしてそれを合わせて入れるんよね。和船は、結局アオリとか角が付いているんよね、洋式の船は丸いんよ。その違いよね。オチヨロ船造るのは、親父と二人で大体一ヶ月やの。農船は、一ヶ月ちょっとやの。自営業やからの、残業をしおった。仕事は、親父から習った。他のもんは、造船所とかいきおったんがおるよね。三年位無報酬であって、食わしてもらってな、風呂を沸かしおったり、水を汲んだり、あれこれ習って、そして、何処の造船所に行っても職人で使ってくれるだろう、というようになったら、一年、無報酬で御礼奉公をする。盆正月位はこずかい貰うことはあてもな、無報酬や。住み込みで子守りもさされおった。ワシ等のときには、中学卒業、今の高等学校の年位で弟子入りしおった。造船所を渡り歩いて修行して、そして、自分が独立しようと思ったら、お客さんも自分で探さにならんしな。親父も、最初

は使われておった。それから、独立した。仕事場を大長でやりおった。皆、見に来おった。よっぽど忙しい時には、百姓しながら、大工の見習いをするような者がおったんやけん。それを頼んでな。そういう人は、難しい仕事になると、「ちょっと畑」といった形で帰るんやけん（笑）。

オチョロ船にも船玉様は祀った。棟梁が入れた。船梁に彫り込んで、そこに入れたりしたね。その中に、サイコロと12文、閏年には13文。大体は女の陰毛を2、3本入れるんやけど、しまいには、女の人は嫌うてね、頭の髪の毛を入れるようになった。女性は、大体は、船を造った家の嫁さんがやった。サイコロが今までいう特殊なサイコロでね。3が前で、2が内側で、別に造るんよ。船玉様は、大体が女の神様だからな。どんな小さな船でも、船玉は入れおった。船玉祀る時には、御神酒で酒1升、米1升、ほいで、一匹付け、大概、ここではタイが入りおったけどね、だけど、ない時には千疋付けで、いりこ、煮干していいわいてってね、塩をおいてね、船の上でお祭りをしおったけどね。それで、御神酒を飲む時には、豆腐をおいてね、冷や奴で、それを醤油付け付け食べたね。千疋付けも頭をもいで、むしって食べてね。これが終わって、船おろしをして、餅撒をしたね。餅を撒いたり、マッチの小さい小箱を撒いたりね。タオル撒いたり。大長の農船でも、下ろしたら、親戚とか友達とか、祝いの旗を立ててね、するわけね。ベッピンがおるころは、芸者を呼んで、船おろしの後、家でも祝いをやったよ。

平成2年まで、船造りをしておった。平成3年の台風19号で仕事場や道具もみなさらわれて。ほいで、仕事はやめて、ミニチュアをつくるようになった。最後に造ったのが、木造の農船。今は、廃船にして、燃やしてしもうた。大長の人のだけどね。大長のSさん、漁師しながら、百姓もしおった。大崎上島でみかんつくりおった。そこへ行くのに、漁船と農船と両方もあった。五区にああいう人がおったんよ。五区は、漁師集落やけどね。ワシが造った船で、残っているのはもうないの。ほとんどプラスチックになったけんの。プラスチックは、ライニングだけ、型抜きもやれといわれたんじゃけんの。これは、やってもダメと思ってな止めた。そやけん、木にグラスファイバーをライニングするのにも、北海道から友達がきたんじゃけん、その時これで大丈夫かいうたんだが、瀬戸内海の船なら大丈夫じゃというたんだがな。船は、みなその職業に

併せた形になるな。船の種類が多いのは、やっぱりこの瀬戸内海やね。

2-3 Mさんのみた花街御手洗の「風景」

この御手洗は、昭和33年に売春防止法ができて終わりになった。

ここの小さい御手洗だけが町であとは皆村じゃった。それで、銭湯も二軒ある、芝居小屋もある、遊郭がある歓楽街やった。それで、その頃はみかんも値が良かったしね、そいじゃけん船の者（もん）だけじゃなく、百姓も皆遊びに来よった。御手洗に夜な。島から隣村から。賑やかだった。隣の島からは、海を泳いで来る者もおったな。着物を頭に載せてね。船大工も何人もおった。

（オチョロ舟はな）それん中に、4、5人（のベッピンサン）が入っていた。寒い冬には、炬燵してな。そして、男性が一人、チョロウシいうて櫓を漕ぐ者がおった。船の偉い人は、陸に上がって芸者と遊ぶのよ。そやけど、ペーペーが船番で上がれんのよ。それへオチョロ船で女の人を連れて行って、沖に泊まっとる船に乗り込むわけ。洗濯したり継ぎ接ぎしたり、一夜妻をやりおった三味線もばらしてね、三味線箱に入れて、現場に行って組み立てて弾いた。船は、小さいので、ワシなんか、なかで寝よか思ったって、寝られんのじゃけん。ちゃっぽんちゃっぽん音がして、揺れるしね。女遊びはでけんことはないけどな、大体が向こうの大きい船に乗り込む。オチョロ船とは別の船で、饅頭とか果物とか鍋焼きうどんとか焼酎とかいう生活必需品を積んで売って回る、ウロという舟もおった。ほいで、ミズ船といって、水を売る舟もおった。ウロとオチョロ舟は形が似ているけどね。ミズ船は形が違った。ミズ船は一杯しかおらんかった。

今の油（石油）になる前は、石炭船やったんだね。九州から大阪や堺の方に石炭を運びおったんやね。車がないけんの、貨車と船とで。来島海峡の潮が悪いと船が上って行かんわけよ。そこで、ここで潮待ち、風待ちをする。で、遊郭がある。その昔の北前船でも、（船が）小さかったときは、地乗りいって、今の安芸灘大橋の下を通って、本州沿いに上りおった。それが、船が大きいなると、（海の）底が浅いもんだから、地乗りを止めて、本船航路を走るようになった。沖乗りになって、明かりがあんまりようないけん、夜よう走らんかった。ほいで、朝こを夜明けに出たら、夕方までに鞆まで行きおった。ここに晩方来た船に聞いたら、「鞆から出てきたんじゃ、今朝」って、だいたい入る港が決まっとった。本土で言うたら宿場町みたいなもんやったわけよ。

「どこから出たと？」と（オチョロ舟に）乗っていく女もベッピンいいおったが、いつの間にか娼妓^{ショウギ}いうようになった。岡におけるのは、芸戸やけれどもね。ワシの若い頃は、チョロはまだおった。ベッピンは、カンタンフクという、上から下までスポンとなった服を着ておった。

町中、午前中は寝とんじゃけん、ほいて、午後から夜中の一時までな、酷いのなったら、朝までワンチャンワンチャン騒ぐのがあった。とにかく午前中はお休みの町やった。人も午前中は、歩いていなかった。回りの村からも、生活必需品とかを仕入れに来おった。チョロは、船だけじゃなく岡の人間にもベッピンさんをまわしたが、呼ぶ人間が気に入らんとチョロウシは、船を着けんかったな。「船着けい」って、石を投げたりな。「御前は、この前の払いがまだけん」というてな。ベッピンさんと遊ぶのは、一晩、職人の二日分の手間賃だった。地の青年を、彼氏みたいにもっとったら他の女連中に鼻が高かったんやな、ワシらの青年時代は、選り取りみどりよ。夜は営業妨害になるけんの、昼間遊びよったんよ。「来い」いうんよ、女が。昼でも宿の親父に見つかったら金取られるんよ、だから親父の声がしたら、飛び降りて逃げたんよ。ベッピンに気に入られるために、自分ちの米櫃から内緒で盗んで、洋裁を皆でやる場所があったんよね、そこへ行行って、「にぎり寿司やろうじゃないか」といって、おなごを呼んで食わしたりしてね、そんなことをしないとだめだね。親は、「おかしな米が減ってるがしらんかね」といってね。18で予科練から帰ったから。ワシが二〇代前半の話。親父も、分つとるのに、「昼にどこにいったんだ」なんていってね、面白かったよ。

石炭船乗つとる連中は、女遊びするのに、自分の本給に手を付けずに、積んどる石炭を荷抜きして、黒ダイヤいうてね値段も良かったんよ。銭湯もある醬油屋もある、皆火を燃やさないけんの、田舎から百姓が山で木を切って、薪にして、割り木にしてもってきてたんだが、女郎やの親父のそこへは、船の船頭がカマス二杯位でどうだといってきた。それで遊べ、ということで、親父はアルバイトに石炭を取りに行かすんだが、実際は、カマスに10も15も袋に入れて取ってくる。で、四国の今治にもっていく、で切れたら、「おーい、御手洗炭をもってこい」ということがあったな。ここは、炭鉱でいうても石炭が出おった。仕舞には、ヤーさんが入ってね、それと、油の時代にはいると余計ダメになったね。油でも、ドラムに一本位は抜いてくれおったけどね、石炭のようにはいかんかった。石炭は、仕舞には九州で積んだやつの上に石を撒いてね、

真っ黒のやつの上に真っ白に、そうやって来るようになってね。万札ができたころでな、週刊誌に大長の子どもは、一万円札で紙飛行機を作って飛ばしよると出よった。このみかん箱一箱での、今治にもって行って、一杯飲んで、女と寝て帰えられおった。今じゃトラック一杯でも、無理だな。わし等のように船大工しとったら、みかんはない、夜、山に行って、みかんをいっぱいにして担いで行くわけ。まあ、時効じゃけんの。2、3人が組になってな。みかん蔵から、蔵出しや、といってすっかり持ってくやつもおった。蔵出しやった人間は、大概つかまったけどな。もってった先が分るからな。

ベッピンさんは、筑豊から来ているのが多かったね。仲買と親と娘と来てね。仲買が交渉して、金額が決まったら、仲買が抜いて残りを親に渡して、娘は元がなんぼか分らんよ。ほいで、「まだ借金が抜けておらん、借金が抜けておらん」というてな長年ずうっと使いおった。年期が明けたやつで、自分でお店をだしたやつもおったな。小料理屋みたいなお店を他所で。島の人と結婚した人もおるよ。ひい孫までできて、この間90歳で亡くなったんやったかな。地元の方は、男の方が金を払わずに付き合うんやから、結婚するんやった身請けの金がひつようやった。多い時には女が100人に余っておった。

べた風の日だったら、船が入らんよね、風も吹かんし。そういうときは、地の青年らが寄ってオチョロ船つけいって、そこに焼酎やつまみや太鼓積んで、おなごも積んで、ナガシデンマいうて、潮の流れに任して、月明かりで、櫓も漕がんでね、というのをようやったね。お金もそんな掛かんかったね。どうせ女も、客取ることが出来んからな。親方もなんにもいわへん。大体、櫓を漕ぐチョロウシが音頭取るんよね。「今日は、ダメど。お前ら人を集めてこい、今日はナガシデンマに行かんか」ってね。ワシも何回もやったことあるよ。

おわりに

御手洗地区は、平成6年7月、全国で38番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。江戸後期から昭和初期にかけての時期を異にする貴重な伝統的な建造物が残っていることが主な理由である。この歴史的な景観を資源として、御手洗は近年では、観光地としてその姿を変えようとしている。今日では本土との間に橋が通ったこともあり、休日を中心に、大型観光バスの姿をみること

も珍しくない。

Mさんが生きてきた、昭和5年（1930）から現在（平成23年4月）までの80年の歴史の中で、御手洗から花街としての景観が消え、少し遅れて、海上を走る和船の姿もまた消えていった。

このMさんの語りを通して、消えていった生活世界の一端を紙碑に残すことができたのではないかと考える。

- i 和船産業の崩壊は、1970年代から始まり、しかもその崩壊は急速に進んだという〔濱田 2010:1〕。
- ii 売春防止法は、昭和31（1956）年可決。この法律により、昭和33年に赤線が廃止された。
- iii 当時、御手洗と隣接する大長にあった三つの造船所についての聞き書きを拙論から引用しておく。

大長と隣の御手洗で、三つの船の形式がありました。新開式、須賀式、宮本式。それぞれ、前のミヨシと中棚の張り具合が違います。ウチは、ミヨシ（舳）は上がってなくて、お腹の部分が少しふくらしている。あんまりミヨシを上げると、浜から荷物を積んで船に乗る時に急になるでしょ。だからなるべく低い方がいい。使い勝手のいいように、そうしたと思うんですがね。新開の船は、標準は七尋三尺から八尋（13.6～14.5メートル）ぐらい。パッと見て、これはどこの造船所のものだと分かります。ウチは、ころっとしたいい女を造ったつもりです（笑）〔拙論 2011:160〕。

引用・参考文献

- 香月洋一郎 2002『記憶すること・記録すること』吉川弘文館
- 加藤晴美 2009「大崎下島御手洗における花街の景観と生活」『歴史地理学野外研究』第13号
筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻歴史地理学研究室
- 木庭俊彦 2007「瀬戸内海における帆船海運業と筑豊炭鉱企業—1920年代の麻生商店の石炭販売と輸送」『社会経済史学』73（4）社会経済史学会
- 坂部恵 2000『かたり』弘文堂
- 桜井厚 2010「ライフストーリーの時間と空間」『社会学評論』60（4）日本社会学会
- 豊町教育委員会編・発行 2000『豊町史』
- 濱田武士 2010『伝統的和船の経済—地域漁業を支えた「技」と「商」の歴史的考察—』農林統計出版
- 宮本常一 1960『忘れられた日本人』未来社
- 拙論 2011「島の子文化誌8大長ミカンと農船」『しま』226財団法人日本離島センター



現在の御手洗の景観



沖の船に漕ぎよるオチョロ舟とベッピンサン（Mさんの作業場に飾られた写真から）



大長の掘り割りに浮かぶ農船



Mさんの現在の作業場とオチョロ舟（前列真中）をはじめとしたミニチュア